

誰もが無限の可能性を秘めている小中高生時代。まばゆく輝く一方、とても傷つきやすい多感な年頃でもあります。いろいろな職業・分野に携わる大人がみずからの少年少女時代を振り返り、エピソードを語りま

す。みなさんはどんなメッセージを受け取るでしょう。

富山ガラス造形研究所教授

松藤孝一さん

母の実家のある長崎生まれ、佐賀 行事もある。戦争や人の生死についてで育ちました。母方の祖母と伯母は長 深く考えているような子どもでした。崎で被爆しており、幼い頃から伯母に 今作っているガラスの作品や僕の生き 壮絶な経験を聞いていました。長崎に 方に大きな影響を与えた、原点ともい は死者を弔う「精霊流し」という伝統 える経験だと思えます。

私が『君たち』だった頃



長崎県の伝統行事「精霊流し」に参加する小学6年の松藤さん(中央) 1984年8月、長崎市

子どもの頃は、画家になりたかったんです。母が日本舞踊の教室に行っている間、僕も習い事をする事になりました。選んだのが絵画教室でした。中学に入って油絵の道具を買ってもらったときはうれしかったですね。

中2の頃、県内の進学校に芸術コースが新設され、行きたいと思いましたが、

高校入学後は美大を目指しました。ところが母と学校の先生が造形コースのある愛知教育大の推薦を決めてしまったんです。美大に現役合格できる実力はなく、実家には私立大や予備校に通わせる余裕はなかったのです。よかれと思

被爆体験聞いて育ち 生死を作品テーマに

た。当時成績が悪く、先生は「絶対無理」と言います。でもなんとしても入りたい。勉強を決意し、いざ頑張り始めると、成績は上がりました。徐々に楽しくなり、猛勉強の末合格しました。

原爆や戦争を直接表現するつもりはありません。あくまでも作品は美しく仕上げたい。被爆3世の僕にしか作れない作品を生み出すことが、自分の役割だと思っています。

現在

松藤さんは大学卒業後、現代ガラス芸術の本場米国に渡り、イリノイ州立大大学院で学びました。帰国後、愛知県でガラス作家として活動。富山ガラス造形研究所で教えるため、2016年富山市に移りました。

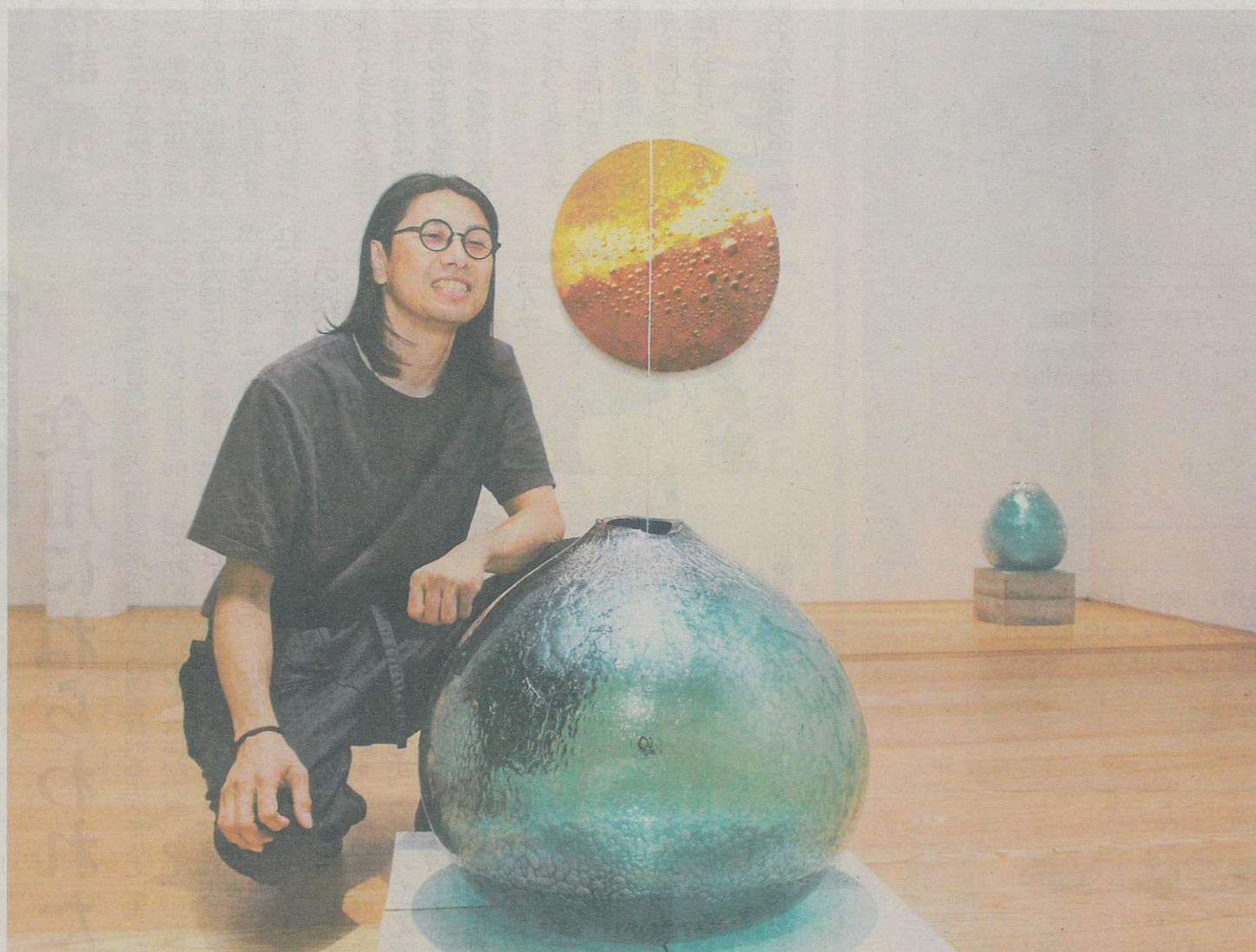
同市ガラス美術館で開催中の「富山ガラス大賞展」に入選した「地球のうた」は、青い球状のガラス内に小型のスピーカーをつるし、森で録音した音を流しました。鳥や虫の声に混じって、かすかに車の音も聞こえます。人間は虫や動物と同じように、地球の一員に過ぎない。そんな思いが伝わってきます。

東日本大震災を機に、核兵器や原発でも使われるウランを含む「ウランガラス」を用いた作品を作り始めました。紫外線を当てると緑色に光るウランガラスの作品は、美しさと同時に恐ろしさも感じさせます。

長距離を移動するチョウ「アサギマダラ」に引かれているという松藤さん。「ガラスは透明で、光が差し込むのがすてきなところ。チョウが見た世界を作品で表現したい」と話します。

自然と人間の関係も創作の大きなテーマです。気候変動やクマによる被害など現代社会の問題も意識しながら、作品作りに取り組んでいます。

富山市と愛知県北名古屋市を拠点に、妻と2人の子ともと暮らしています。51歳。



富山ガラス大賞展の入選作「地球のうた」を前にほほ笑む松藤さん＝富山市ガラス美術館

チョウが見た世界を表現

お子様の学力アップのヒントになる参考情報がご覧いただけます。左のQRコードからアクセスしてください。